



世  
一  
家  
系  
四

5  
4110  
4





門入利5  
號 4110  
卷 9-4



俳諧一葉集附合之部三

元禄二己巳

菖蒲うきふらふら山王の夢外  
吹河けうきまの雪花  
物々鴨帰るぬ鴨ささハエ  
七輝山を如うく月  
町造り粟の焦らさしけ  
家系とほくふりさの魚

古學庵佛号  
幻窓 湖中 編  
坎窩 久藏 校

菖  
雪



坊主とも老ともいふは進まぬ  
土の餅一つく神事おぼろし  
生簾千熾けりし市に多宝  
の嘗て跡つれきり可け  
吉白丸境あふ食とつて切り  
おろしき島をよこし眼糸  
舌根千念佛と修女居士衣  
小珠ハ箱の中にはけりも  
杖と歩せぬ破上もあ  
膝行不伝や姨捨の月  
委切千垣根代りし扇右  
頂脊はもふ狗の尻しき

翁 聖 翁 聖 翁 聖 翁 聖 翁 聖 翁 聖 翁 聖

もの真まも弟子の尺端のまき  
川の真まのうつし桶の名を  
柴垣の古木おぼろし  
後とまらんしう様はくろし  
季よまのこのひしを秋の風  
賢きる音は月了ひめく  
長門より西の嶽は松田  
粥より玉るを何と喰らん  
山をむの海を多他極極  
ちりし藤をくろ費る  
やうせん大江の岸ハ八行  
削るはみし林家の墓

翁 聖 翁 聖 翁 聖 翁 聖 翁 聖 翁 聖 翁 聖 翁 聖



沙謀及とちの酒のぬきのかは  
 直紀の枝子神と渡つて  
 花くも(能子物にさうさ  
 許こみ(と何部渡すま

翁  
 翁  
 翁  
 翁

陽光の赤肩子たつて衣の  
 水和のうすけし(衣の  
 此のたの習法のか物あつて  
 多きうのそと手猿の海可  
 こと(と何部渡すま  
 うらまをかくり物にさうさ

翁  
 曾良  
 塔山  
 此筋  
 良  
 翁

藤原ハ衣子たつて衣の  
 埔のうすけし(衣の  
 五月中のし小神の終も親の  
 花くも(能子物にさうさ  
 許こみ(と何部渡すま  
 うらまをかくり物にさうさ  
 こと(と何部渡すま  
 手よ(と何部渡すま  
 物のき(と何部渡すま  
 桐の葉(と何部渡すま  
 花(と何部渡すま  
 浪(と何部渡すま

翁  
 山  
 良  
 山  
 翁  
 山  
 良  
 翁  
 山  
 翁  
 山



宮崎くはるきりしれ鳥城館  
 心ゆくおしりしあらのあしり  
 蝶々の砂をくはる善投く  
 ねきりし火成吹持はふり  
 り之り連山子はる星月夜  
 照るころきはあきりしり  
 山ゆりきりしるる雲の銀  
 尾木ふりしるる苦うけの小屋  
 作りぬきりしるるやまをむ物心  
 喉の百合子流りけけけ  
 狼のあしりしるる夜の月  
 くの窟子佛つりしり

山 龍竹 葉 弱 北 龍 良 山 葉 弱 山 良 弱

素直がうはるけの酒のあえり  
 花の徳りしるる新のあ物  
 何あしり人のほろとあをさけり  
 接りしはれハ細の浪枝  
 一門の花はるるはさるしり  
 けりしるるあはすりしり

竹 龍 山 葉 良 弱

歌以念瀬翠桐亭

穂ゆふ人をあはれりしり  
 まふいしりしりしり  
 ちりしり市の仮面をふりしり  
 何の中ゆりしりしり

弱 翠桐 曾良 弱



藤のつるをよみたるまのふきりて  
藤の葉をよみたるつるをよみたる  
藤のつるをよみたるつるをよみたる  
藤のつるをよみたるつるをよみたる  
藤のつるをよみたるつるをよみたる  
藤のつるをよみたるつるをよみたる  
藤のつるをよみたるつるをよみたる  
藤のつるをよみたるつるをよみたる  
藤のつるをよみたるつるをよみたる  
藤のつるをよみたるつるをよみたる

良 柳 良 柳 良 柳 良 柳 良 柳 良 柳

藤のつるをよみたるつるをよみたる  
藤のつるをよみたるつるをよみたる  
藤のつるをよみたるつるをよみたる  
藤のつるをよみたるつるをよみたる  
藤のつるをよみたるつるをよみたる  
藤のつるをよみたるつるをよみたる  
藤のつるをよみたるつるをよみたる  
藤のつるをよみたるつるをよみたる  
藤のつるをよみたるつるをよみたる  
藤のつるをよみたるつるをよみたる

良 柳 良 柳 良 柳 良 柳 良 柳 良 柳



昔の葉ハ枝の端や枝に  
あをを味く 休人 葉う  
ふも又あををいおむ石の上  
展けしきく只のすの舟  
真すちと叶をくくは杜宇  
かすけすの矢も投る丸葉  
花のたの葉ををさぬ、葉を  
始さくくしりか、火煙をす  
一葉

葉 二寸 曾良 楓 楓 良 楓 葉 里 翁

たぐの風程を物よりさつ  
路よりふり脚を花の葉をく  
跡生くれくすまのつこす

翅輪 秋鴉 楓里

四月廿二日

風流のけめわたくの何種歌  
度多をすをたてあまけり  
水と記して屋敷の石やまきしん  
葉子、味のをいりす  
一葉、く月をさす川、柳  
屋上、根ふく村、秋、つ  
蝶の女、上、縁、佛、を、酌、て

翁 良 躬 翁 常良 等躬



女成ふのーやとほむる物  
あつ時ハ枝子も骨の入ぬくむ  
梓の小枝子もを満く  
うみてハ妹、島の名も惜し  
言はずー山や白鳥おとけ  
酒よりハ軍も送つ軍も本こ  
秋も走つた物と物とー信  
文の秋の登つて破つ麻の角  
鳥のお休の位ふせつ月  
いろくの形もをく舞つて  
也ーまき骨をほく糸遊  
いさ死尾をもく手やむらうん

翁良躬翁良躬翁良躬翁良躬

芥 塚とるー信あつめー女  
新いくを舟一船の法あつて  
村のー武士のあを籠る木  
華とーぬまのあを合  
字子百能ーいふ君とつし  
多枝子もを耐とさー入  
何やー事ー此たぬ七又  
位多る木の枝は力を見よ  
すしき希くむとあゆのぬ  
切櫓枝くくーにさう強し  
右山鶴のあつてさう  
味ーさやほちとさうさう

翁良躬翁良躬翁良躬翁良躬



穀生石花ふとくしつる  
花をききりぬり色尋ふ  
酒の中らふひのきむのき風  
六十のぼろく人の正月もれ  
春のつすくあふ少細る

良翁 翁 翁 良翁

業門可伸の如く業の本はらう後を  
むすく

から好むや月をぬきを新の業  
すれく業れくつるもか子  
きり崩す山の井は名かえりあれて  
畔傳へしする石の棟く

翁 栗庵 等翁 曾良

把くく古葉くく力のきつる  
秋走く魚は橋屋を多れに  
梓弓矢の羽は名をかえりあ  
穀葉もよふく曉の夜  
松苗余と吹動くく手の業  
酒の遺恨をくく海ありし  
聲入ハ流しゆのみも願き  
されておくれの葉情のぬ  
夏はくを新くくめく拙きよ  
月のひらくをきびくく尺の  
菊くく海魚釣くく一葉を  
笠の端もすく草のうく枯

等雲 次年 素葉 翁 富翁 翁 良翁 竿葉 翁 翁 翁 富翁



梅子あけつ初瀬やよみおの付  
かきつたる善き証被ありし  
るはにまを志しすもあぢ  
まゆりれぬ悪敷きくま  
まこ鯉成りゆく春の美しく  
かえりて花の穠や香しく  
くもあけつ初瀬やよみおの付  
杯を可くする市井酒酔  
け便り三杯の流をくちやて  
けり合中しはめあのうら  
ゆきある高野の甜をさる  
四五白肉をえり海士の家

翁 良 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁

あけつ初瀬やよみおの付  
かきつたる善き証被ありし  
るはにまを志しすもあぢ  
まゆりれぬ悪敷きくま  
まこ鯉成りゆく春の美しく  
かえりて花の穠や香しく  
くもあけつ初瀬やよみおの付  
杯を可くする市井酒酔  
け便り三杯の流をくちやて  
けり合中しはめあのうら  
ゆきある高野の甜をさる  
四五白肉をえり海士の家

翁 良 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁

おきの家をこゝろ 破故帳  
くしめしうらぬ 包の 蕙

風流  
翁



菊池 花を折る人ぞ  
芳之のくす 虹のかき  
そらさる月を二重の  
了希く花を折る人ぞ  
棋けしる祖父のくす  
字くくろみさるお  
梅のさうみきりや  
すしれをゆけし  
三歌久く月を折る人  
波のさきく 鳥の  
空くぬれぬ月を折る  
花さみけしる月を折る

孤松 曾良 柳風 秋華 霜 良 依 菊 如 柳 木 端 菊

の 池 花 を 折 る 人 ぞ  
疾のくす 虹のかき  
花を折る人ぞ  
花を折る人ぞ  
の 池 花 を 折 る 人 ぞ  
の 池 花 を 折 る 人 ぞ  
牡丹の葉を折る人ぞ  
花を折る人ぞ  
武士の葉を折る人ぞ  
花を折る人ぞ  
花を折る人ぞ  
花を折る人ぞ

孤 菊 霜 依 柳 風 菊 秋 華 柳 木 端 菊



秋文々 控子子からん 若のさ  
くくひすくせく 丹徳の谷組  
系致すうあを居る 又百 若  
出 塚の紙子 又ゆらか 又火  
たう 併 併の者く 殊く 又  
よろ 控して 又ふ 糸魚の白法  
ほくく しく 石のうら 戸の崩れく  
くくく 山も 又の 法 控しく  
くくく ちを 居る 又 細く 又  
若くく しく 又 控 又 又 又

良湯 柳 風 瑞 翁 法 流 柳 良

清く 又 又 又 又 又 又 又 又  
若の 故き 又 又 又 又 又 又 又  
藤子 又 又 又 又 又 又 又 又  
夕月 又 又 又 又 又 又 又 又  
楠 又 又 又 又 又 又 又 又  
若の 又 又 又 又 又 又 又 又  
又 又 又 又 又 又 又 又  
又 又 又 又 又 又 又 又  
秋田 酒田の 浪ま 又 又 又 又  
る 又 又 又 又 又 又 又 又  
素く 又 又 又 又 又 又 又 又

清風 菅良 素英 風流 英 翁 法 良 翁 風



名被り美人のかしら無く  
 雲かひりらくせ誓ひの如し  
 八月や申酉の方たぐり  
 月をぬき破る月の戸  
 干能のたしはせく花おし  
 七手のくしける牛房芽をさす  
 燈籠しのぼりきりかめぶん  
 火串さくくし西北風をぬ  
 扇さしやききききききき  
 ぬし付きてはまきをぬきぬ  
 大経のりえ石の舟ける天乙女  
 艶あつたききききききき

英 良 風 篇 良 英 篇 風 英 良 篇 英

物りあつたは流るるききき  
 きりえをせむらおのぬき  
 一きききききききききき  
 かきききききききききき  
 ききききききききききき  
 木賊のり男やききききき  
 ききききききききききき  
 ききききききききききき  
 ききききききききききき  
 物きききききききききき  
 追えききききききききき  
 初りききききききききき

英 良 風 篇 良 英 篇 風 英 良 篇 英



起所の庭よりゆくは小窓の  
豹の毛をくわく夕立の薫  
けり廻りて夕露のぬくも  
石のうへにそよば舞のの月  
空に清くも青花はほの影も  
大小の音を絶ては秋も  
げとぬくを念をよとわ折つん  
雷のゆめぬらハ松の枝  
まじりたるおのやらの葉の  
香のこころき地をえ  
ひたえとも美女とおもす

清風

菊

菊英

菊良

菊

菊良

菊英

菊

菊

菊英

紅粉白粉の市のあつそひ  
あつそひハ秋のまゆのさし  
研りて病を象傳の月  
遅むらろ船の中あつそひ  
舟の枝のさし雨を干  
象傳のちかちかえんを  
美す急あつそひ  
中の作はハ美きみくそ  
若くし入るせばあつそひ  
果のやえ棒よかちかえん  
今そよよを挽く  
二の字ハハ美くハ帳子討の

良

菊

菊良

菊英

菊

菊良

菊英

菊

菊良

菊英

菊

良



多敷しやう内十五款  
令利於ふは枝の秋の廿十  
板直つ三の樟の木  
つくしと廿うに丈あつて  
父、旅宿を位りしす  
くさすも我の海すかの星  
くさすも我の海すかの星  
くさすも我の海すかの星  
くさすも我の海すかの星  
くさすも我の海すかの星  
くさすも我の海すかの星  
くさすも我の海すかの星  
くさすも我の海すかの星  
くさすも我の海すかの星  
くさすも我の海すかの星

英篇 風良 篇 英良 篇 風良 篇 英良 篇

篇

一葉亭集行

さみしれを慕ひし涼川  
岸より舟をこはるく舟杭  
瓜とけいさうあやう氣さう  
里とておひひり素の菊  
牛の子うららるる鹿心  
雨やとやうとやうの吟  
袋をこ枕うさうとやう  
松路ひそく玉井境  
永未お古ふ寺飯をいきて

篇 一葉 篇 川水 篇 袋 篇 水良 篇



芳と何しする大いもの此  
葉の尾をこめてはむと  
瓜紅つる双六の  
を揚るすれと火のこい入て  
杉ふ人子号る秋  
お留る舟の月了る言なれ  
破るてととえりてむさう  
花のほちを織する  
澄繁いとあま山うけの塔  
疎多村を浮舟の外のま富く  
刀持する甲斐の一  
岸垣人も通るぬ并ふし

茶 良 水 菊 水 良 水 菊 水 良 水 菊 水 良 茶

物さくくしひり割る相の木  
早あやう梨ハ白髪にかき  
集り遊女のたもとむ月  
露の海多世もやうぬり  
柴くまうわくお海さす  
合歌吹本のけを屋のかけら  
多ししあくす万の  
古の友あし法をいふ  
を葉編する舟の葉合  
をみそれ沙をの市の多  
煤拂のりを学苑の室  
元人も古や懐紙かき

茶 良 水 菊 水 良 水 菊 水 良 水 菊 水 良 茶



やも久鳥のまらふ入  
おひつてと望とこくつお噂の心  
山田の移をいふおむる雨

水 卷 良

羽是山合曼阿園梨のふ流有管お坊ま  
有るやをきとめくす風の音  
任作と人の跡や文  
舟内強き音も引くま  
難の流はくす足ゆる三有  
澄るや夫もくくす秋のくれ  
おもあも 磁 たら  
銭くす小堂のかけ守るは鏡

着 露丸 胃良 珀雪 殊妙 梨水 聖

百里は花を木まの午追  
山合くすや珠の流をまむ  
岑 折すくむ神木の森  
番よみの流き山り家ありて  
豆くくぬ板ハ何と流鬼  
古師あを奇すおん松皮膚  
多き之枝のきかしの歌  
月尺くす引起されて神き  
勢あふくすくすすの香  
ナメくすくぬかすく花折る  
的場の事く喚るふふふ  
まを強く七のく力の石

菊 丸 良 水 菊 丸 聖 良 丸 菊



汲るいさく醒る井の  
足曳のこころをすくむわら  
敵の門を二夜も守りし  
かよ清く雪を砂井の地を  
妻とてやうり山をのち  
し中を八極の枯葉の上を  
ゆめをくくくくくく  
龍のうをすくくくく  
藤玉をすくくくく  
月山の嵐の風を骨を志を  
海浜、大浜、編纂の象  
ちとくひん様をすくくく

丸 水 良 入 雪 丸 水 翁 丸 良 入 丸

雪をすくくくく  
ゆめをすくくくく  
新とくくくく  
鴈のさくくく  
帯をすくくく

水 會 良 翁 丸

哲子重行亭

取くくくく  
好くくくく  
絹織のきくく  
園生をくく  
香島をくく

重 行 翁 良 丸 丸



瑛子 小樽と什  
 山の深千 浦之りり 帆玉船  
 藤ふみや 里ハくちととと  
 栗稗 もり ぬの 齋の 喰飽く  
 うのらう けい 行る 石の 戸  
 赤櫻と 母の 記念の 極を くれ  
 雀子 踏しう 小田の 新 ぬ  
 け 秋の 門の 極 鶴くちととと  
 敷 丸くちも 焼て けい けい 月  
 きぬし 八 ねん くの 同し ちの 隆  
 布の 女 ね ぬ 物 け け  
 算入の 花 見 了る ち ね け け

丸 菊 良 丸 菊 丸 良 丸 菊 丸 良 丸 菊 丸 良 丸 菊

二  
 巻 記 の 巻 一 一 巻 千 年 後 々 々  
 奈 良 の 巻 千 巨 越 々 々 々 々  
 け ち 千 先 河 々 々 々 々 々 々 々  
 翁 巻 々 々 々 け け 々 々 々 々 々  
 々 々 け 々 々 目 々 々 々 々 々 々 々  
 々 々 け 々 々 友 々 々 付 々 々 々  
 々 々 の 巻 々 々 千 松 系  
 壱 牛 の 巻 々 々 々 踏 っ 々 々 々 々  
 々 々 儀 の 巻 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
 々 け 々 々 々 け 々 々 々 々 々 々 々  
 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

丸 菊 良 丸 菊 丸 良 丸 菊 丸 良 丸 菊 丸 良 丸 菊



江泉のそよぶ陸奥の秋風  
初冬の頃よりさよおのためし  
山をふ化つる雪の暮智  
尼名男の子まきこころ  
ゆきかぶくおふね橋  
花の樹をこやしはるまき  
野をこころしきまのしん

良玉 丸 丸 丸 丸 丸

酒田不玉真袖浦江上

河川と山や吹海のけり夕涼  
海松かゝる磯ももむ帆  
月や上関をかるんほお

不玉 曾良 翁

民のかやとのりり秋風  
さよーまほりたやるる色  
河川松のまをさよふ暮の毛  
火を替りける白髪もれは  
海をハらもまふさしきりせは  
松あさおくる武隈の古  
子秋おのりまきまのさし  
あさこの舟や新らか  
お供してゆきふおん  
は寺の末もみよりの入  
約はよまあ帯寺の終の

良玉 翁 良玉 翁 良玉 翁 良玉 翁



くふまのしらとまの気念  
輝く花あけの菜蔓おそ  
二 獅の鳩は南無の月  
ものつゝ木魂のゆくまの  
すくゝハ流りきゆの山姥  
強かり蹴つ月はふる毎侍の  
杖をゆさむる鳩の草花  
幼あハハハあふ岩を踏く  
えひくうをぬひくそは  
ゆるめん原を信生直く  
月さく清く陣中の市  
海響ハ古昔の集りかぐ入

良玉 良玉 良玉 良玉 良玉 良玉 良玉

小袖袴もおくる戒の河  
象う原の母子似くも海りび  
負りしを河のぬ家ハくれも  
まの良の系持侍くも古今集  
花の刺きり村の海花  
黄のの鼻をくは初る羽つひ  
蚕種くもふも帯あまも  
瑞本を伝し古も是を尺ん  
下ふるもことあむ交を

良玉 良玉 良玉 良玉 良玉 良玉 良玉

文月やらの考のねまぬ  
成好直に侍

福



あまののこころの桐の一葉  
おとろけの食ふくもさうさけけ  
海寺の小舟をたを上の役  
新編のちりまを尺さきり  
おの木下よりけいへく候換  
夕あらしは吹くくぬ石の巻  
豊とくおとく候りけいあ  
さひうけぬを休まきりけい  
きぬくの境を起ち直りけい  
数くの恨のふれおつふり  
後よりくくあきりけい息  
ゆらりとおきかたのさきり

左葉  
曾良  
眠臥  
此竹  
布囊  
石雷  
枕筆  
良葉  
義年  
葉

麻引くもあまのあくさる  
堪あすくくくぬ巻衣  
もらふ二人の山本の虎  
花の冷をまききりけい  
障の羽をくく候のけい  
まゆを契割火の流りけい  
あまのこころのあまのあ

巻  
酔  
桑  
手  
巻  
良  
石雷  
曾良  
葉



此下十句ありし

秋風おくる父の松より  
かの葉を隠すてに拾ふ  
既して後より玉此古  
梓植ふ小枝よむの葉を流  
雨のゆくり此はハ長  
葉をひく雪をたけしき雪の上  
一ちり鳥人多たて飛  
金山や総て小砂を拾ふ  
科の却りしを鳥籠の  
受てしもの百そと魚の身を流す  
人ひそひしき手り書り

良翁也右雪翁良更や石雪翁

松柏の枝に飛はるる  
子を耐えをうる松の床  
ゆり老の杖をぬき  
昔の月山子向ふ  
捨皮むく老の杖此秋意  
志らけし家此は生動  
塔濱の孤村の夕  
清いゆめあり九半  
かこふたし地蒸の  
強とふありふ里の  
恍惚をよし志の  
身本をこえゆく梅の

良翁也右雪翁也右翁雪



志保くくくお名や少ね吹花  
花をたんちて新くくく月  
踊るききいき秋の鼓あむ  
よりの踊りをも刃ぬくられ  
きくもやえ新きくもすては  
河くくくくくくくくくく  
信あふき破り河けくく天を捨  
雨子洲崎の思もくくくく  
くくくくくくくくくく火はき  
乞食起くく物もくくく  
蜻のゆふてハ定子もくく

菊  
披墻  
水枝  
谷ト  
卷生  
志掃  
夕布  
教益  
親生  
曾良  
枝

葉をたんちてはや  
夕雨のすく玉乾子  
子をほえつても難  
侍のきくくくくくく  
そら舞習ふ末の世  
洞子きくく月の中  
はくくくくくく味  
釣糸も裡の床か  
帯くくくくくくく  
替くくくくくくく  
ゆくくくくくくく  
去賣捨け捨子人

菊  
ト枝  
墻  
親  
市  
益  
生  
良  
枝



かゝらとらうりに性あるふ  
一梅子おれおむ三の月  
秋のちれきく香肩のひろ  
空あうく之八の袖のさく  
美しきよきとる出くく尺む  
よけれ子三の子おれ櫃を  
身こきくひし佛おの板  
改代もくもあえやになつ  
京のさく月北仕方ゆき  
園ゆき五の鳥はきれふ  
あきさくくしのほのきけ  
大うこは村とるきくはく

市翁塙生ト親翁枝良塙親翁

虎くく尺ゆる町<sup>三</sup>のきく  
風送る被<sup>三</sup>かして涼し  
若<sup>三</sup>衣ももい女とて  
古ふ又子のあきともあ  
あけの情子爵わゆるむ  
志<sup>三</sup>らうまかしくを捨  
花<sup>三</sup>や<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>て<sup>三</sup>を<sup>三</sup>を<sup>三</sup>友  
学<sup>三</sup>の<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>り<sup>三</sup>も<sup>三</sup>筋<sup>三</sup>よ<sup>三</sup>ふ<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>り<sup>三</sup>  
う<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>く<sup>三</sup>し<sup>三</sup>や<sup>三</sup>を<sup>三</sup>ふ<sup>三</sup>に<sup>三</sup>の<sup>三</sup>山

市ト塙良親枝翁

少幼虎<sup>三</sup>し  
跡<sup>三</sup>名<sup>三</sup>若<sup>三</sup>子<sup>三</sup>に<sup>三</sup>料<sup>三</sup>理<sup>三</sup>也<sup>三</sup>瓜<sup>三</sup>若<sup>三</sup>子

翁



みーいさきまゝふたねのりか影  
月もくもゆくのまゝ了次く  
すき百さひいさ村れ生垣  
秋後取の門をふくして根のき  
小桶め清多終ふ竹  
七つうひとあうしと娘の恩  
うとふしーやうあめらう原  
すみあひふあうそめらん地  
ともーい清もはちうも  
肌さふく暖ーい  
村のうま木千干あう  
ふーいあうううぬ中と縁理し

一泉  
左任  
ノ松  
竹袁  
終子  
雲口  
乙州  
如柗  
北枝  
曾良  
流志  
泉

さーめさゆるふはさういぬ  
糸うーい箱下の糸ぬふ急な  
阿ーい踏くお走山のや  
子の戸は花ももしう知ええ  
細歩ーいもーいーい

扇  
枝  
浪生  
良

七月廿六日觀生亭

ぬれてゆーい人のわーいや白の葉  
花かられうーいすたかへく家  
月尺ーい漁もあま船めけ  
干ぬかーいしをちらう  
おぬき屋宿のきり受ぬ

觀生  
曾良  
北枝  
生



響ふくくく了女一花  
夕と輝く湯水の明は出ふ  
戸を打てておの酒樽  
切の雨の古く置もらすれ  
花の地を舞う花のや  
晩清の物のかくも中  
あをさすおの守樂の船  
肌のみぬ女のかかり  
ぬめりうすれくあ  
よきうら木よりあす  
うみあの上の境の  
あしはの枝の枝も只

翁良枝翁生枝良生翁良枝翁

おのあきゆる岸のあ  
おすすの生るあ  
あしを急る月の  
あはる花の米  
解る翁そ  
岸の羽やあ  
くの上の扱  
ひきさ木魚  
目後  
その片とあ  
あらしあ  
あ社の櫂の

生良枝翁生枝良生翁良枝翁



く物心の無きやうく初空  
一く心なきおろしむらむ技持の乳  
可あうく片飛ぬの戸障子  
袋一く心も枝よ故帳物く  
うみきくあはれ文ハおとゆの  
入山此のくくくくくく  
あわくくくくくくくく  
完くくくくくくくくく  
甲ハ毎此中くくかられ  
追剥の破とあく守秋のこれ  
月く起竹も答の  
長き歌く基とくくくくく

翁 良 枝 翁 生 枝 良 生 翁 良 枝 翁

翠々園より二人、かたもものこし  
新くとしてゆき梅くくあ傷け  
汗ハ手透り流る新 風  
四九の門くく不二のくくく  
齋 平くくくくくくく  
長生ハ徳文入果の恩 源 吉  
跡、終ハやきくくくく  
ゆきくくくく帰くくあれや  
酒くくくくくくく

生 翁 良 枝 翁 生 枝 良 生

ゆれちく人あれ曹のくくく

翁



ちうくも枯く露の秋草  
渡しも獨り丘の月うけり  
志付し位くお座しき人立り  
海音にまゝお傘さしり  
ひそくうきひく大手の梅  
きまや二々多のこし謀めり  
音つる油障りりり  
初冬に多ま走ともりり  
吾りつりされし信のふりり  
提灯も湯女もゆりけりり  
玉子貫ふりり山もと  
栗の戸ハ納豆りりは朝し

亭子  
菟  
子  
菟  
子  
菟  
子  
菟  
子  
菟  
子  
菟  
子

鈴鹿のあつりり梅きり  
野暮り人ハ三子みりり  
よきて舟のりり月ハ川  
福持ぬ芦屋ハちりりり  
古寺の軍の骨ハ白  
やふ入の跡や送りりり  
ちまみほひりり  
うつくしき佛も佛りり  
はりりりりり  
きりりりりり  
きりりりりり  
きりりりりり

子  
菟  
子  
菟  
子  
菟  
子  
菟  
子  
菟  
子  
菟  
子



令利を鳴ふ了 陵の坊  
竹のわき割し 笑の思ねる  
本家の早苗も 小百姓  
郭の力田も 赤子をゆする  
付ぬ 敵の法圓ハ 一き秋  
良食く けりハ 流石の 舟子  
守の 館も 著かりし 花  
十重二十重 ちの けり ちの 舟の 花  
秋葉 一葉も けり けり 里人  
旭の 光も けり けり けり 長  
残光の 秋葉も けり けり 垣

子 子 子 子 子 子 子 子

山中の温泉

うらうらと 蒸気の けり けり けり  
花の けり けり けり けり けり  
舟の けり けり けり けり けり  
霧の けり けり けり けり けり  
雲の けり けり けり けり けり  
雨の けり けり けり けり けり  
雪の けり けり けり けり けり  
氷の けり けり けり けり けり  
春の けり けり けり けり けり  
夏 秋 冬

北枝

良枝 良枝 良枝 良枝 良枝



先祖の骨を傳へし門  
まのめをり此上望かくれし  
高やんさく物橋のり竹  
秋風をものいふぬ子と傳へし  
まらき紋の伝へく葬れ  
花の色は古ふおれ所傳へし  
まを傳へる言切の答  
昔もや志願く難波の貝伝へし  
浪の小玉とあしり芥枝  
多穂子志とぬの埃おもしろい  
うつくしく花と現く霞面  
境小油煮ものうすの古風し

菖 枝 菖 良 枝 菖 良 枝 菖 良 枝 菖

林苑人もう人伝。菖 菖  
野ふしの甚うたしを淋しき  
ゆき花の他つ三り力の細  
初春の草の枝とゆりし  
小畑とちりし伊勢村神倉  
飛燕の素島り永もくやまに  
向うれくもく枇杷伝へし  
阿比ふ仙女の姿伝をやうす  
あうの志願くぬの白浪  
仲經の字伝ぬ所とあ浪ぬ  
寺の傳へるをまら上  
境持ておん花の姿こり

菖 枝 菖 枝 菖 枝 菖



旅人 といふ生うれゆく 執事

九月八日小却しりの番化

路通

一と南の尺智る萩の松の由  
むしの院痛を骨縁のふ  
絨子もふ又あつに内冷  
あつにむもむ世のこつふ  
板木屋ハ板木ノ軒を伝すむ  
倉のすゝぬるうハぢりしに  
れ後ろ人今尺ささる又万香  
吹そこのくす村のさつしさ  
慧のうあつ海し松れ製産

曇夕  
白之  
浅夜  
霜  
曾良  
父  
通  
良

木因

ほろふあつしつめおそあつ入  
釣のちり萩の香くゆりさ  
月尺あつきし松の製産  
きんしのみ具拾くる布ふくろ  
地郷松をささるの念さ  
きぬしのみ具拾くる松あつん  
跡、垣松子あやむおもうけ  
豆敷ひくもくゆめぬ里の花  
るの葉ちと伝ひすを  
きさつちや首ゆく胃きつて  
あつしにらるる香の松星  
蓬まうし船子米積がすく

秋  
之  
通  
因  
秋  
之  
霜  
夕  
良  
秋

三十一



この一ふ 室よりおとこをいれ  
ぬきくものむ使われ後と記  
旅うら旅く せりひまめ  
そとら無地まのの 歌し  
業多つうう人よりはく  
田を買しうひしとふふ業門  
知れうら業は入  
夕月お夜をうらうと業張て  
そらく(空お秋の夜 候  
谷く 八新酒を飲と  
くや 過ぎをれうらう 梅上  
おあれうえわとと送了 約 詞

通 翁 歌 通 翁 夕 良 夕 翁 通 歌 翁 通

麦もうけし一ふとのま  
響けききる百う花 候  
故 候

翁 夕 靴 華

九月三日 菅原の歌

野河くく 八 候 候  
山くく 八 候 候  
初月や先西もをさらすん  
波のさすく人よりうら  
木を挽て枕のさすく  
酒のさすく 干 瓜  
おつう 隣の物をあう

不知 荆口 翁 如行 左柳 浅香 斜嶺



己少おあやよきりむ車のお  
いしをいお人のあまの引さぶく  
寂音の面をまかりけりけり  
すのよひの鐘をわよきし思ひし  
業よめぬ月のさむいし  
夜をいし結きくくさ苦みれ  
細代の鮫衣衣のあさけり  
舟の形まきりゆくかろく  
止落くらしも松のきのあは  
花のを吹雪のまほひくつ  
ぬきえそをもく岫の山よ

風 知 翁 松 翁 香 衆 知 月

とやく笑ぬまもさし言の菊  
くくくくくくくくくくく  
新くくくくくくくくくく  
をくくくくくくくくくく  
酒飲の癖子孫をのめく  
程ゆりくくくくくくく  
足のくくくくくくくく  
手をいふれくくくくく  
二人のあまの心わぬぬ  
けつり 離子 精進くく  
兎角くくくくくくく

翁 左 柙 路 通 文 鳥 越 人 如 行 荊 口 此 筋 木 因 銭 香 曾 良



書物のくららの紙魚とくららの  
 蛇とくららの松たらのくら  
 巻物けとくららの貝とくららの  
 力なく流中あつてくららの  
 何うつふあつてくららの  
 一棒子くららの山の崖あつて  
 培すくららのまきの糠みそ  
 茶葉のほあつてくららの  
 村とらけ中つてくららの  
 叫きくららの柳のそはた  
 二代上手の響はあつてくららの  
 初らけくららのほとくららの

斜 扇 竹 節 人 通 竹 節 良

点けくららのぬいぐるみ  
 冬籠子のおおつてくららの  
 美くくららの衣もあつてくららの  
 月影子具足とあつてくららの  
 萩とくららの一本の萩  
 何子とくららの萩とあつてくららの  
 追まもくららの萩とあつてくららの  
 丸腰子けつとあつてくららの  
 物のかけくららの母りくららの  
 花のかけくららの萩とあつてくららの

竹 節 人 通 竹 節 良 扇 竹 節 良



梅山子とて、秋のつよ、  
辰

いさ子休とて、  
折あふりさふ、  
胸等ゆふ風やむ、  
居を撲く、  
麻の衣、  
きくく、  
物とふら、  
常より、

良品  
梢風  
之燕  
去芳  
半残  
不  
菴

はう、  
冬、  
るの、  
角入、  
秋、  
等、  
通、  
雨、  
強、  
首、  
袖、

風  
秋  
菴  
不  
風  
菴  
風  
菴  
菴



いひてしやけし 奥州の宮  
昔生し 奥の幸初はせしはこれ  
林とらききり 花ふ咲の戸  
病ふ丹と別きハ安ふ海の色  
凡新仕とく 風のみのゆふ子  
寺の中 操娘ういふる 旅名  
よふ石とこれハ佛きくく  
瑠璃燈ハ月をくらり こと  
傍の髪 刺 髪 の 文 々 様  
をみま 一 みるめくあんと 結 糸 糸  
鬼うこれと 畔 子 綱 糸 糸  
せれま 一 燈 子 の 糸 糸 糸 糸 糸

不 風 菊 蓮 花 不 菊 花 不

白髪 糸 糸 糸 糸 糸  
古義 長 の 糸 糸 糸 糸 糸  
糸 の 糸 糸 糸 糸 糸

花 糸 糸

枝や 糸 糸 糸 糸 糸  
糸 糸 糸 糸 糸  
暦と 糸 糸 糸 糸 糸  
糸 糸 糸 糸 糸  
糸 糸 糸 糸 糸  
糸 糸 糸 糸 糸

菊 蓮 花 不 菊 花 不

糸 糸 糸 糸 糸

菊 蓮 花 不 菊 花 不



初かみあまの将監り 善  
るの能くあまの梅也  
おこをいそむるにまのけ  
伊勢の海よられ素襖をあやうに  
かうたのそを贈る古  
村人の糸のむらうらあう  
鶴江門流をそううう  
造りあまの海も甘  
月もあまの良をうあ  
妹うや海を種々の生  
あまのうらすのまを  
そはくしの糸の衣を授け

木白 配力 麦 風 芽 子 孫 力 風 麦 翁

かーうけの 鶴江の  
此ちを能くあまの梅也  
肩子持ぬの付のま  
あまの男の足をも  
そあはしてあまの海も  
善紀子まのまの  
女 嘆 するの戸の内  
伊勢のいこの餅を  
宵中ハをくか  
ととれらるの  
まをいそむる  
あまのうらすの

白 力 翁 白 翁 芽 不 麦 風 翁 白 芽



赤らるるもろりーや野々、黛  
 七文り憂をかーる深うさ  
 奈くしてをる河さきふ月  
 柿の木は枝ももくさうをたて  
 飛てまきさーくもや取れも  
 河り若の踏ちうひらうゆ侍  
 小斗の星をつてお村や  
 庭の瓜あううさそくつん  
 松ハ一か山の神し  
 乞念ーるちかきすさ落すれ  
 後子ししあつてさういふ  
 幸あうちらうし破のちうく

力 芳 翁 風 疎 白 款 共 麦 翁 風 疎

ぐくぬ方お歎かきつて  
 此はま火を柱あうひらう位  
 赤ぬ川う来て路邊の名を向  
 引うひく芳翁の踏子さうけ  
 月の夜を拭てさうふみさ  
 月のお志うみー飛と美ーは  
 きぬてあしき意のらさうひ

百歳 式之 翁  
 力 翁 風 芳 白 不 妻

雲千今ゆらや小斗の星のお  
 海の音あつあつあつあつ  
 一つうい野の木をさうかう

百歳 式之 翁











戸の月を待しのる水  
秋の千木跡紅も吹まひり  
垂ふ左あはれま方の陶  
節きうう志賀の田の雨きうま  
ふうおうれうむ峰まあ虫  
三  
まのりえ長柄の傘の笠のま  
熨斗も付くかきうの紋  
白粉の代もや屏の鏡の良  
珠まむ業をもうきうす  
風くぬ手納包の火のちけ  
おを引する梅の片き

休翁 命 休翁 命 休翁 命 休翁 命

月夜をあの夜の色まう  
壁のかきうあを今き

落沾

翁

昔末のやう久の宿のかきう  
木下をも観くきうよの

曾良

まを分翁からぬきう  
世末を言候く程きう川の  
すの川とまあ手納の  
つひきう

桃雪

雨と終し葉の赤は流尺う



夕合ふ小娘の糸の月おろし  
秋の夕の糸の月おろし  
曾良

あさこの花をよみかたは  
ゆらゆらとよみかたは  
あさこの花をよみかたは  
あさこの花をよみかたは  
あさこの花をよみかたは  
曾良

あさこの花をよみかたは  
あさこの花をよみかたは  
あさこの花をよみかたは  
あさこの花をよみかたは  
あさこの花をよみかたは  
曾良

あさこの花をよみかたは  
あさこの花をよみかたは  
あさこの花をよみかたは  
あさこの花をよみかたは  
あさこの花をよみかたは  
曾良

あさこの花をよみかたは  
あさこの花をよみかたは  
あさこの花をよみかたは  
あさこの花をよみかたは  
あさこの花をよみかたは  
曾良



物とく、棒ハ、方子、埋、行、し、木、端

六月十五日青島函館分亭

翁

涼、き、和、海、入、し、る、ま、み、川

令道

月、を、ゆ、り、ま、す、浪、の、浮、海、如

不玉

黒、野、の、花、ゆ、く、危、の、危、的、的、

定連

胸、も、と、ハ、胸、子、ま、り、む、を、き、れ

曾良

波、と、ら、の、お、み、成、り、し、市、を、待

任曉

新、子、ま、り、す、る、青、の、油、火

扇風

不、操、娘、の、こ、ら、り、ま、る、意、志、名

會見

こ、ら、り、ま、る、れ、よ、お、り、ま、る、山、の、空

杉、の、花、り、と、を、く、り、る、月

翁

夜、休、の、ま、み、の、ろ、ろ、を、携、り

不玉

以、り、跪、ら、る、ま、り、お、り、し、法

曾良

茶、欄、子、の、ろ、ろ、を、携、り、し、枕

翁

茶、の、す、り、れ、を、携、り、け、る、月

棟雪

極、ろ、ろ、の、花、を、秋、の、い、ま、に、

更也

下、り、の、め、け、し、き、義、の、い、

曾良

翁

翁を一紙にのり

小春

今、朝、の、や、ま、の、花、を、携、り、し、る、秋、の、端

何、と、も、月、の、花、の、底、さ、し、き、は

翁



初花の山あり方ねけし  
にあらりしき水のみさ魚  
備良 小枝

物さし扇引さくその枝  
笑しと花下しきほひも  
扇 小枝

送子  
秋のうねりなきし  
義しと扇やしき花下し  
木因 扇

吹くことわらつれなき  
吹縮の笑ひも  
光清 扇

元禄三庚午

二月の白

古井の煙草も  
百葉 木

指さす方と月ひらむ  
村鼓 式之

梅を吹折風の中  
梅額 一桐

花を去らんと  
槐布 被

四  
三  
二  
一



昔は海子に百餘す  
 古の成りしはぬまなく  
 として海にふか月の如き  
 位特多や越子木実の  
 鳩吹人になすす回ふ  
 珍物を禁の市にけり  
 探検手むけの事  
 探骨探るる事  
 嵐おろす事  
 雲の色新古今  
 尾上もなる  
 柳の酒のさきぬほ

木 扇 木 扇 木 扇 木 扇 木 扇  
 木 扇 木 扇 木 扇 木 扇 木 扇  
 木 扇 木 扇 木 扇 木 扇 木 扇  
 木 扇 木 扇 木 扇 木 扇 木 扇

素とよ苗と一度  
 ゆうき終るふ人  
 にはなる子の  
 宿して米稻に  
 御幸もこの  
 大肉や井戸  
 地震やうら  
 三のり母の  
 取尺とひん  
 掛香も小  
 之味保  
 赤山

木 扇 木 扇 木 扇 木 扇 木 扇  
 木 扇 木 扇 木 扇 木 扇 木 扇  
 木 扇 木 扇 木 扇 木 扇 木 扇  
 木 扇 木 扇 木 扇 木 扇 木 扇



けりちりあきし 智恵地のこ  
まきふゆの杖 きこふらふまのさ  
水子 しくま 花のま 子

空之相

木のもよにけしと 餘と 梅のふ

菊

西の長きうし 花てきまき  
娘人のきくみまのまきまき

如珠  
水碩

月やあらは 後の内裡のり  
物約つゝ 松のまやまき

舞置の三葉 物うたのまき

菊水  
菊水

片もきんし 酒うさ

入道子 海濱のうらまき

菊水

中よまき 山は

菊水

物まき 花のまき

菊水

有尺の 花のまき

菊水

有由の 花のまき

菊水

物まき 花のまき

菊水

如珠  
水碩



又七何にのちりきりあは  
しきものもさしひらきし  
懸け足とよと後より  
手朱弓紀の舞方かく  
酒して元ころもさふら  
又六の目を取くすし  
飯の持竹すあふま  
中（に去下す）及れハ  
赤きハ里れあふら  
みかれころぬ踊の  
月形（す）のり  
花すきりし

水 瓶 水 瓶 水 瓶 水 瓶 水 瓶

只四方あり  
一葉の  
醫者の  
花咲ハ  
地すき

水 瓶 水 瓶

木の  
の  
際  
ま  
多

雷 洞  
去 芳  
良 不  
風 麦



稻のふくらむ最の粒の實  
石櫃の縁目と尺の昔の象  
鳥ようれしうの囀ゆ多作ホ  
お首の志はしりやとおまじむ  
木幅何れうの葉の夕らぬ  
旁危とたきむ人のしらひふ  
井戸のたこふらひよき切し  
涼しきの得のあつし月をまら  
むしりもたしにたしと感さる  
痛しめるのきうく女の尾をすて  
非よりえらうの胎母子の左刀  
夫人らに紅つけらしす花さく

三箇 半 麥 不 洞 麥 芥 不 麥 翁

白のふくらむ二の粒さけ  
陽光のさきんに揚をひふすは  
すけふくせいの言ふさけ  
そのふ秋の囀囀さう揚の  
ひとくのきぬききうつう  
勝るかまの飼養をすくはるく  
まに新しよ麦くをきく  
佛のつうのうらふさく  
源やそくうらふさく  
ひらたふの言をすまふ  
菫子穂のうら火の香 絶  
夕月を扇に結く秋の風

三箇 翁 麥 不 洞 麥 芥 不 麥 翁



春のついでに人々のあし  
きりきりやのちと名をつけし  
能くやゆらんかおしけきい  
り入る二葉の駒を控さずり  
彌さきくあしぬ志のち  
海さつ花を眺もさるれや  
きしやう月く家住しきり

伊賀の山中

種芋や花のさうりにあゆむ  
火種をさけし風をくくし  
酒母のかしらも花をさるれや

菊

出芳 半歩 菊 芳 麦 不 卷 洞 跡 芳

秋風のついでに人々のあし  
きりきりやのちと名をつけし  
能くやゆらんかおしけきい  
り入る二葉の駒を控さずり  
彌さきくあしぬ志のち  
海さつ花を眺もさるれや  
きしやう月く家住しきり

四十一

良不 跡 菊 芳 麦 不 卷 洞 跡 芳























旅の籠先の所ありし  
 正香 正秀 昌房 之通 珠碩  
 正香 正秀 昌房 之通 珠碩  
 何おのこいそ 根のふく  
 水 末 翁  
 子有 根 雲の 臺 所の 伊 藤 吉  
 水 末 翁  
 人ともまき 籠 一 所 ちふの ぬ  
 水 末 翁  
 又と 大 なる 此 籠 を ぬ ぬ す  
 水 末 翁  
 堀 ち づ 回 の 喜 や き し ぬ ぬ ぬ ぬ  
 水 末 翁  
 加 茂 の 社 の 籠 や 一 ち ち ち  
 水 末 翁  
 物 づ ぬ の 籠 を 言 く ぬ の ち ち  
 水 末 翁  
 雨 の や ち ち の 籠 を 迅 速  
 水 末 翁  
 籠 籠 の 喜 喜 の ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

志 ぬ ぬ (ぬ ぬ 籠 の 籠 ぬ ぬ)  
 水 末 翁  
 糸 籠 籠 一 ち ち ち ぬ ぬ ぬ ぬ  
 水 末 翁  
 喜 ぬ ぬ 月 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

秋 ち ち 干 瓜 ち ち ち ぬ ぬ ぬ ぬ  
 及 肩  
 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
 珠 碩  
 早 籠 籠 を ち ち ち ぬ ぬ ぬ ぬ  
 之 通  
 人 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
 昌 房  
 猪 籠 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
 正 秀  
 虎 籠 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
 標 志  
 春 籠 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
 項



たりぬ路の安もたるとは  
 す急きふ新炊のたふ百巻  
 非写悔の娘のゆき  
 うけし星合町の常と止は  
 肌寒くいと情愛何れ  
 月の雲海と世所きを喝餅  
 菜をも耐ふくと寺の住人  
 上張り解ぬむむ印のし  
 の糸手むふし雲の物吹  
 としと椀板ぬふもさく  
 花ひつりくまのまの入茶  
 ちらふみ川とく長家きよ

志是碩肩房志系碩是系房

羽折橋の備あめり  
 行して新起習ふとふ  
 筆をもやまむふの味  
 母親の体立て尺さる嫁入想志  
 志りすかむと且取山伏  
 ぼろ店も持て在るの門構  
 麦を煮る身す咽のかまむし  
 殺引の首をも登るさくはし  
 香の小向す志す其むる  
 志しとかむの侍る座もるた  
 こころも告る秋の心よと  
 山畑の木除色つく風かき

扇肩系扇志是碩房志系碩是系房



石地の坂を帰るや切  
情は心算の大工歌  
あつたを跡より美良の借上  
那の度と事しあを植るけ  
かゝくことする事のわけをの

碩 肩 是 碩

月見す、望み美き想われし  
庭の柿の葉のむしりも花  
火柄ぬる直のよ夜もあつた  
おきあとの、古も枝枯木  
尻張のめしとくくく、塔の鯛

尚 白 白 白

百太走見く川の上  
字、實にやあの人系ふ美か基  
雨のくもり、昼故痛きをぬ  
一切、らふらして跡の音の  
さひくくの子は飯はくむこ  
いそぐくと法う、あつた油筒  
あふとあつたれてるやれ、袋つ  
月のあおきえしてあつた、あ  
枯枝か、うや、あつた、あ  
侍者、あつた、あつた、あ  
大工の換をい、あつた、あ  
三々の積ふ、あつた、あ

白 白 白 白 白 白 白



ハさうくすまの葉の吹海  
つづつとすく根の底の底  
打のらるすすくすくすく  
商人の橋りきしるの橋  
物とくすやばいすくすく  
藤のまゝすくすくすくすく  
笑のすくすくすくすくすく  
畑のすくすくすくすくすく  
字のすくすくすくすくすく  
善哉仁すくすくすくすく  
随分おすくすくすくすく  
字取のすくすくすくすく

霜 白 霜 白 霜 白 霜 白 霜 白 霜

さくすくすくすくすくすく  
ありのすくすくすくすく  
小すくすくすくすくすく  
いすくすくすくすくすく  
あすくすくすくすくすく  
あすくすくすくすくすく  
おすくすくすくすくすく

霜 白 霜 白 霜 白 霜 白 霜 白 霜



かり梅しるるかーくこの葉  
河知手作の代のうーくしと  
麦の小くぬをもくくぬ  
齋さし一志き帰る跡子  
願わうや急解の息  
とー蹴の帯さ美しく細と  
久ーき路の歩りおぬーき  
山さりの地のゆーるさ  
かふと音うーく跡子  
月うけし舞のまえとゆいけ  
物うきも布子のねふま風

菰 是 菰 菰 菰 菰 菰 菰

又と孫生の女債もすは  
時しと花の咲くぬ新 菰  
昼葉わうーしてや在るさふく

菰 是 菰

あしとむしきさよふ内の手  
舟をさくくさ置こくす  
ゆりぬをぬも梅ぬ花の葉子  
隅さうけけうさうのせはーき  
とらしとぬさこい直る草の跡  
味さうぬさうさうさうけ  
赤ものま別る菰のさうさう

菰  
成秀 路通 文章 惟然 猪脰 正剛



石の多き石の書けきよむ  
 影朝の森を足りてきよひ  
 ふす月ゆるしき対向り  
 拍子木子物ふ徳のちつれ  
 流をとるさくさく大牛  
 月影千の如く星の向の上  
 只ちりりしときりす  
 粉こまふはうら秋をあらう  
 繁の白髪をとり物尺けり  
 幸しのもちきりし友の歌  
 きしつ身とせしぬまの  
 きの葉のいハ芥を吹雪

楚江 勝重 葦香 鬼峯 正秀 別 重民 重古 翁 学 則 睡

さややくとものちりきき  
 あけまつたゆきうらハ戸を  
 くらりの山をさきり木  
 汗をきく人ハうらさき  
 せめてさけしも煙管放さ  
 風止るささるさきし舟  
 只一ハなとこのむ後もの  
 けしハなとこのむ後もの  
 月尺をゆきしやうし松立  
 秋風子細の岩焼石の電  
 葉のゆるゆるメさひき  
 支能ふるさハなとこのむ

正幸 江 峯 然 通 菜 学 峯 睡 通



あをそふた刀の反すをたよ  
長橋子詔古意を打とくさ  
時き時しをねるゆきき  
職人の不ゆいさくあゆけ  
南おもし子矢とむるあ

重成  
柳沅  
糸  
弦五  
去

考の明も殿いぬ初しと行  
一吹風は本堂走りゆく  
段引の勢いゆめと川さし  
裡も折す深さくゆき  
まのく戸さきとひくく雪の月

去来  
翁  
史邦  
史邦  
翁

人子もくねい名物の梨  
まふくつ雪路おひく秋あり  
とねららうふたうやまのさ  
何のもしきやゆいし  
里んくくあて午の具ふく  
むつとさる吉舟のあまのさ  
莫きあの花のとくくしとちる  
吸物えおのあまさるいああ  
三里あ中りあさういけり  
ひまると魚回、男はあうい  
さー本付さる月の籠  
若ふうくあさうさるまの

末  
邦  
邦  
末  
翁  
翁  
末  
末  
翁  
翁  
翁



ひとりの道りしと鈴の振立  
 一時の物の思ふとよ  
 火とも一に思ふれはあやの  
 涙を可うてなひよこ  
 瘦骨のまゝ起直らうと  
 せはしけを捨て路をかまら  
 おもひ切らうと死を  
 青天子の月の影を

末 鈴 末 鈴 末 鈴 末 鈴 末 鈴 末 鈴 末

伽藍の秋の良の妙  
 葉の戸や草をまぬらされて  
 布子美あつふ他のみ  
 押合し宿しハ又ハ  
 一かみの鎌付の  
 枇杷の古葉の

鈴 末 鈴 末 鈴 末 鈴 末

文章

引越す家のすまやの月  
 柿の葉をささす  
 買ふすの程の葉を

支考 篇















沙吳公高京樹丸無引

半りそ種も友もや手わすれ  
 多しや去民の伊物納  
 小の光の世のゆけ系部  
 やの夜もくもおもかちの  
 小中しすよあし月のか人  
 秋すつやあまらひの枝  
 實入よふ言部の子回希  
 里らるくもるすの所  
 お一割してたもくもれ  
 奉加すわの信のそ  
 去く川や算部の出も

示石 九犯 吉来 系契 乙州 史邦 玄哉 石 本

六十五

右とひくも荆棘吹く  
 洗滌る存れ何く結の業  
 糲のひくも此あもくも  
 上る止ふ下と物おひ  
 くれ走く張の襖もくも  
 字幾人う名西を尺す月毛  
 吉の海もくも鯛の濱校  
 屋らりお南もぬあも  
 向あるくもと南あも  
 米あもくもつくも物も  
 夕もかもくもやのあも  
 くも後もくもあもくも九十度

好春 石 丸 州 形 本 石 玄 史 乙 系 吉 九 示

六十六







月代や縁のまを重なるや  
萩寺くけさるいさり於

菊

桿枝や鶴のうらたえゆるか  
秋をく風を尋ふしう門

珠頂

まのゆり入仲りの何をけし  
赤人もと一しの酒探煙

之道

去是くさふるあゝ振る  
珠頂

珠頂

菊

元禄四年末

踏通

あゆみたる名をきくも  
わさのわさめ子ひくく案且

絨香

わさ猫子神言猫通ふ等快て  
ほしき丸くさぬ張の月

此筋

物とわさるぬ糸なかつて  
仁といふれく後る志しう高

子川

解入るる名をきくも  
是る古風の子の奥筋

執筆

現しき系と付し受ゆるむ  
新とわさるる名をきくも

菊

此里をわさるる名をきくも  
此里をわさるる名をきくも

通筋







うらひすきふあつこちの春 色

梅の枝葉やうらわの木のともけ 菊

空のうらひとよまのあけの 乙州

あつたはやうらまのあけのや 珠碩

志とよいふふらうらまのあけの 素男

斤陽のあけのうらまのあけの月 州

二階のあけのうらまのあけの秋 菊

あけのあけのあけのあけのあけの 碩

あけのあけのあけのあけのあけの 碩

あけのあけのあけのあけのあけの 碩

あけのあけのあけのあけのあけの 碩

あけのあけのあけのあけのあけの 碩

あけのあけのあけのあけのあけの 碩

あけのあけのあけのあけのあけの 碩

あけのあけのあけのあけのあけの 碩

あけのあけのあけのあけのあけの 碩

あけのあけのあけのあけのあけの 碩

あけのあけのあけのあけのあけの 碩

あけのあけのあけのあけのあけの 碩

あけのあけのあけのあけのあけの 碩

あけのあけのあけのあけのあけの 碩

あけのあけのあけのあけのあけの 碩

あけのあけのあけのあけのあけの 碩

あけのあけのあけのあけのあけの 碩

あけのあけのあけのあけのあけの 碩

あけのあけのあけのあけのあけの 碩

あけのあけのあけのあけのあけの 碩

あけのあけのあけのあけのあけの 碩

あけのあけのあけのあけのあけの 碩

あけのあけのあけのあけのあけの 碩

あけのあけのあけのあけのあけの 碩

あけのあけのあけのあけのあけの 碩

三十一

三十一

三十一

三十一











泥 赤かどしむらぶし女をか  
石 佛いりきりけぬえあうり  
牛 の骨うし牛 化しとや  
海 の体かきくけけと破れし  
堂 の八島とあつてあいつ  
みらぬくはせうのあつて  
二 唾の古似するくらゐの青き  
餅 子の友をほしむる春の雨  
系 少ちうに志をいふは  
物 への後そとにむす  
疹 してとる 法の安さよ  
行 足つて拾ひて平人の古き版

翁 通 翁 通 翁 通 翁 通 翁 通

ゆう 心いふとあつてあつて  
供 物いふとあつてあつて  
畑 の中よりあつてあつて  
扇 ねりしとあつてあつて  
松 ころ 登りてあつてあつて  
や さしけりしとあつてあつて  
ほ らしめりしとあつてあつて  
お ちりしとあつてあつて  
は ちりしとあつてあつて  
飯 籠いふとあつてあつて  
佛 子あつてあつてあつて

翁 通 翁 通 翁 通 翁 通 翁 通



業をほむむむれーるむ

執筆

標志

佛阿ー此諸之故等や密由  
月さーくくろむぬそと  
旅の虫をえ業を討けりむ  
名村 市一の志見らり  
産者の子位と人  
又魚ーくく魚の枝  
高屋子頭 軒はくくは  
くくくくくくくくくく  
山侍の侍笑の上ゆの事

正房 昌房 娘子 菊 及肩 楚に 志

狂歌の集を編く  
出来合の物振るん袖肘向  
小舟 飛ぶくくは塩の上  
名舟子 かくそ  
新編の破のわく  
かーくくくくくくく  
子のくくくくくく  
笑おのくくくく  
かーくくくくくく  
帰るの舟のくくみ  
くくくくくくく  
又くくくくくく

江子 秀 房 志 菊 以 系 房 子 菊



此のあを看て物言さりしは  
 遠路を物言さりしは  
 麻の糸とてははるかに  
 ちよとくさくさな  
 名跡を惜むるは  
 みらねくや物の子を  
 こころをさしぬりしは  
 お雛の男を中の子  
 一様の子には  
 浄瑠璃やうに  
 凡そわが心

房 子 房 子 吟 志 房 子 房 子 房 子

百々のうらも捨をさしける  
 待たさしは  
 海うらもさしける

江 房 子

牛車屋の故の春物  
 正植の上の  
 海志の  
 扁四  
 くれ  
 道  
 及柳

正 野 吉 文 史 昭  
 秀 童 来 草 邦 通



遊りの薬もあむさ  
 休らむも癒さしむの息もく  
 海に心真の海いふせさ  
 生干あゝ素折跡をすうさ  
 川の心あお持花の下枝  
 秋をて又一とさくあふけ  
 昔縁さくく信者の月  
 糸糸のあまきさくさ子のこれ  
 痛うつさささくさ世さうゆ  
 夢時さささくあぬ花のいさ  
 袖とあふさささくさささ  
 人情夢燈玉いささささ

末字通翁 末字通翁 末字通翁

七五

青月おしとさささ  
 う記しとをけおける障り  
 綿雲さささくさささ  
 硝子さささくさささ  
 さささささささささ  
 学あささささささ  
 明石の城の左替さささ  
 大あささささささ  
 ちさささささささ  
 ゆるさささささ  
 夢 ぼろささささ  
 白ひさささささ

翁通字 翁通字 翁通字



又といふらうの小籠あひあき  
多し持し物見し一多し開し  
油かけをぬるはるをくく  
くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく

学 末 童 象 執

くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく

猪通 昌房 翁 正秀 野徑

すくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく

乙州 画好 珠碩 盤子 里東 探志 游力 通 象 末 力



東風吹去わさる菊水の旗  
 野の晴るふりく影ゆくん  
 皇親上多子あけて家付  
 恨り義理を法し海をわ  
 くもれと折し一もの海流  
 くるやうきてもふくまの法  
 御のさし来る月の廻廊  
 雪の寄岩屋の坊を折現ふ  
 られ神の力をききも帰す  
 りと走もまのりふけを踏き  
 白雲さしあすふの命をぬ  
 ちしきくき我の指を距えて

子秀 州通 翁通 州通 翁通 州通 翁通

野のさし来る月の廻廊  
 又ハ先ニ史文選つしし  
 中保和しやる昼のくくね  
 おき入る氣を結ふをわし  
 子履ふくむに居るもの  
 内書くは信のハ五家を世の如  
 蓋のわ入あふやうれ  
 文福四年の初冬茅屋の道通翁と  
 かしき  
 月くぬけたりふの好むよ子の如  
 火を折あしきよのきん

徑通 子秀 翁通 州通 翁通 州通 翁通

斜嶺  
 如行



一季の仕るのハ妻に相さかしくし  
 かよ 弦ふさをさし 忠風し  
 歩走して射と出るるのけし  
 山雀を花をさける小城を  
 秋風と瑞りけ渡り長いるを  
 夢のよさを難くしむ  
 梅端の虫破くするは露の縁  
 念佛のあまの御りゆゆ  
 われんとはぬふふ小袖あしめし  
 おさあふとらぬのあしめし  
 ねく位にるまの物しハルをきり  
 宋つふさしし物にひきゆく

蜀 荆口 文島 此蜀 左柳 忠風 残香 千川 蜀 口 辰

鶴おらるるハ雲を折るる  
 ちりけりぬのさきしむる  
 物をの葉も花をさるる  
 月利しきをさるる  
 其自心桃よりさるる水心花  
 土屋よりぬのさきしむる  
 新りのさるるすまのま  
 ありぬのさきしむる  
 せんくのさきしむる  
 夢のさきしむる

蜀 柳 蜀 白雲 桃味 甘雁 支者 以之







阿のたかハアキ新海を志行く  
るはまの川の水  
干もの逢うて一針  
魚のさうりして尾を  
吹赤く松のさくらを  
材を狭し紀の松

之水 舟 雪 元 石 之

は里えらるる河面や冬  
まろくしてほそく  
いふかきるふら一  
流の松を

支考  
冷水 白雪 雪丸

海しきりし月  
小地所のあや  
終るの拍子  
世の観音  
小袖  
竹の管  
三日月  
花の

芦雁 柳隼 扇車 以之 柳先 柳後 者 富 丸 舟



花あし霜をうき散りも是上り  
 春もよわくぬ火屋の白帯  
 漸と塔ららるるやうきみ  
 腹子のまめ。味方の物  
 多とせし事なり。命をたをける  
 町の松をこしお仕る  
 海少し濁る。おれ塔をゆえ  
 秋は清し。義朝の星  
 昔も麦畑の草ゆき。そけい  
 小つゝのあけき。なくの月  
 さかしのさかき。貝の丸貝  
 乞食とあし。し支那がし。よ

之 桃 水 菊 之 重 後 先 鯉 丸 者 菊

きしむける宵中のをを。お拂ひ  
 きれ。ゆる弦を柳。さきうら  
 素湯ひらら。おさ尺。けし。つら  
 花を林ひ。あ。の。生。え。る。病。精  
 免。さ。し。と。り。向。の。方。孔。あ。け。う  
 極。の。糸。ら。ひ。く。る。石。新  
 念佛。の。す。め。せ。ら。る。塔。の。友  
 ま。さ。い。く。度。の。保。生。め。し。度

存 之 寺 後 重 水 先 喘

菊の住庵をわく。あ武。う。赴。き  
 ま。あ。と。懸。田。う。し  
 ち。仙。や。き。ら。う。お。降。子。の。も。録。う

菊







交虎もく人とのうらみ  
 升戸の端もいふまき  
 降さの縁を帯て内を付  
 むしりもさへけりて飛す  
 雨したる朝のくちの尾を  
 神るりんえさるるも子  
 修路り紅粉付らるる  
 長手もわらう二り  
 珍みすおまふと飛付る  
 夢いかにさへさるる  
 何のさるるさるるの  
 かさし、扇のちもあはけ

瀑 不 菊 不 瀑 菊 不 菊 不 瀑

さのうらみ  
 幸ねもく人とのうらみ  
 登うらみ  
 夢いかにさへさるる  
 さるるさるるさるる  
 坂のさるるさるる  
 月影と縁を帯て内を付  
 舞すらるるさるる  
 朝のさるるさるる  
 雨のさるるさるる  
 房のさるるさるる  
 楓 櫻 舞 の 坂 の さるる

菊 不 菊 不 菊 不 菊 不 菊



ちりちりたる嵐のやうな  
 石苔のまじりたる  
 見ゆればは物さへも  
 木くぬやまの橋すま  
 花あはれはまはる  
 流るる水も

瀑 石 橋 芳 瀑

以上四十句

久保康平のま本のり  
 さくらんぼのま  
 おとしのた  
 ちの  
 不又

岸の青波とて

ちりちりたる嵐のやうな  
 石苔のまじりたる  
 見ゆればは物さへも  
 木くぬやまの橋すま  
 花あはれはまはる  
 流るる水も

句 空 去 来

芽斬りしころに  
 大いけの  
 帽牛の  
 人の  
 乙州

丈 草 去 来 乙 州



湖ありてさうもいふは良のき

翁

浪りまわされしはさうもいふ人

文章

高きとて友とていふはさうもいふ

許六

おく庭もさうもいふ木の梢もさう

露川

山まわりのさうもいふみゆの虫

翁

さうもいふ海や海にさうもいふ

翁

一歩さうもいふ張子の雲

李由

本可くいふもさうもいふ一歩

規外

四々五々のさうもいふ

翁

初階もさうもいふ秋もさうもいふ

翁

さうもいふさうもいふ一歩と

如行



Handwritten marks at the top of the right page.

Handwritten marks on the right edge of the page.

1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100.



